第２章　子育て応援 Seed
～誰もが関わる子育て支援に向けて～

はじめに

一般的な育児サークルは、乳幼児を自宅で育てている親（多くは母親である）が中心となって活動をおこなっている。したがって母親らは、サークルの活動日には自らの子を連れて活動場所へ向かい、時には活動に必要な物品を用意・運搬することにもなる。もちろん、自らの子の面倒ばかりみてはいられない。サークルのメンバーである他の親子に気を配りつつも、自らの子からも目を離せない状態で活動することになる。こうした活動の多くは、子どもが就園・就学するまでの決して長くない期間に限定されるとはいえ、「だからこそ」というべき重責が、子育て中の親にのしかかるのである。

このような育児サークルの運営の難しさを軽減するような活動をしている団体が、秋田県秋田市を中心に活動する「子育て応援 Seed」である。「子育て応援 Seed」はそうした育児サークルの運営面での支援のほか、親子の居場所づくり、子育て情報の提供、子育て学習会の開催、保育サポートといった活動をしている、子育て支援団体として位置づけられる。しかし、現在の形に至るまでに大変興味深い過程をたどっている。ここでは、2006 年９月 12 日に秋田県ゆとり生活創造センター「遊学舎」にて、「子育て応援 Seed」代表の山崎純さんにうかがったお話と、「子育て応援 Seed」のホームページ等の資料を用いながら、「子育て応援 Seed」の生い立ちとその特色を紹介したい。

１.「子育て応援 Seed」の生い立ち

（1）育児サークルから OB 会へ

「子育て応援 Seed」は、2000 年に「育児サークル スマイルキッズ（以下、「スマイルキッズ」と称す）」として山崎さんが立ち上げた育児サークルが原点になっている。「スマイルキッズ」は、保育士経験のある山崎さんが、自分の子どもが幼稚園に就園するまでの約１年間にいろいろな遊びを子どもに体験させようと、周りの親子を誘って立ち上げたものであった。１年間という限定があったためか、１週間に１回、「凝りに凝った」活動を行ったという。

１年が過ぎ、子どもたちが就園して「スマイルキッズ」の必要性がなくなった。その際、「スマイルキッズ」を解散させるという選択肢もあった。しかし、引き継ぐメンバーがいたため「スマイルキッズ」は存続することになった。山崎さんたちは「スマイルキッズ」から卒業し、子どもたちもそれぞれ別々の幼稚園へと離れていくことになった。とはいえ、「ここで知り合った親子は幼馴染みのようなものだから、お互いの子どもたちの成長を見守っていこう」と、母親たちは OB 会なる集まりをつくったのだった。

OB 会では母親どうしが集まって交流を深めるだけではなく、子どもの幼稚園が休みのときには子連れで集合し、外で水遊びをしたり、染め紙、バーベキュー、雪遊びなどをしたりするなど、秋田の自然を活かした遊びを企画した。と同時に、「スマイルキッズ」の現メンバーに頼まれ、イベント時に手伝いをすることもあった。現メンバーと OB 会の子どもどうしの年齢はそう離れていないため、子育ての「先輩」というよりも「ママ友だち」としてのつきあいが存続していたのである。

（2）OB 会による育児サークル支援

OB 会が「スマイルキッズ」を手伝っているうちに、子育て中の「スマイルキッズ」のメンバーから OB 会に相談があった。「OB 会にスマイルキッズの運営をしてもらえないだろうか」という内容だった。子育て真っ最中の「現役の人」は、自分の子を連れて「スマイルキッズ」の運営をしている。たとえ自分の子の体調が悪くても、活動日にはメンバーが待つ会場へ出向かなければならない。好きで集まっているサークル活動とはいえ、子育て中の母親の身にふりかかる負担や責任がどれだけ大きいかは、経験者の山崎さんが一番よく知っていた。すでに自分たちの子どもは幼稚園に行っていて、時間のゆとりもある。そこで「今はできるんだから、やろうかな」と、要請を受けることにした。こうして、「育児サークル スマイルキッズ」はその OB 会が運営する、という形にスタイルが変わったのである。

OB 会が「スマイルキッズ」の運営に携わるようになって１年ほどが過ぎ、山崎さんは育児サークルの運営の大変さをあらためて知った。このことは、知り合った他の育児サークルの代表者らも同様に感じていたことであった。山崎さんは次第に、こうしたサークルの運営の手助けをしたいと思うようになっていき、育児サークルの OB たちを集め、2003 年、現役の育児サークルの手伝いをする「サークル OB 隊 Seed」を結成した。これが現在の「子育て応援 Seed」の原型である。「サークル OB 隊 Seed」は、会費などの運営のノウハウや、これまでに育児サークルで実施して楽しかった遊びやおすすめの絵本などの情報を収集し、2004 年には育児サークルのスタッフ向けに「Seed 通信」を発行するに至った。

（３）サークル支援から子育て応援へ

NPO 子育て応援Seed　No.14　H18.4.01 発行

Seed 通信

皆さんこんにちは、
子育て応援 Seedです。
長いまに続いりを告げ、秋田にも
ようやく春がやってきました。
温った土、軟いたアスファルト、木々の芽、
つぼみ、遊ばたのつくしやたんぽぽ…
ほっぺに触れる空気とにおいを、胸いっぱいに
吸い込むと、不思議と元気がわいてきます。
「おんもへ出たいと待って」いたのは、
子どもも おとなも一緒ですよね。
さあ今日も手を繋いで、のんびりお散歩に
出かけませんか？
Seed 通信もリニューアルしました。
これからもいろんな情報を
発信していきます。
お楽しみに…！

子育てサロン「スマイルキッズ」のご案内

「親子が一緒に楽しめる空間を提供したい！」とのスタッフの熱い思いを胸に、５月から子育てサロン「スマイルキッズ」がスタートします！わらべうたや英語のわらべうた・マザーグースを中心に、季節を感じながら親子で一緒に身体を動かし、楽しめる遊びを企画しています。また、日々子育て奮闘中のパパ・ママに、「ほっ」と一息ついてもらえたら…と、後半には「カフェタイム」もありますよ。赤ちゃんもちろびっ子も、パパ・ママ・おじいちゃん・おばあちゃんも、みんな一緒に遊びに来てね。プレママさんも大歓迎！いろんなお話、しませんか？

場　所：サンパル秋田・和室（大町・旧ダイエー５階）

●・・親子ビクスでいい汗かこう！

子育て応援 Seed では、ママ＆主婦６歳～未就園児のお子
子ビクス」を開催しています。プロのインストラクター指
ちにも馴染みのある元気な音楽に合わせ、親子一緒に楽し
です。おもいきり体を動かしてもらえるように、先着 50 組限
また、４月から、親子ビクスを卒業したママ特選の「マ
タート！　春から何か始めたい！なーと思っているママ、転勤
かりという親子。初めての方も、どうぞ気軽に遊びに来て
かいて、親子でキラキラ笑顔になろうぉお問い合わせは下記

インストラクター　津石　まり子先生
会　場　秋田県青少年交流センター（ユースパル）

会　費　１回券¥500（会場費・講師謝金・通信費などに
対　象　スマイルベビー……　６週～１才
持ち物＞室内用シューズ・タオル・飲み物（
ひざ掛けサイズの毛布・専用ボール
スマイルキッズ……　１才～就園前
持ち物＞室内用シューズ・タオル・飲み物（
ママビクス……　ママならどなたでも！
持ち物＞室内用シューズ・タオル・飲み物（

＊ スマイルベビーは、初回にビクスで使用する専用のボール(¥6
購入して頂いています。
＊ 会場の都合で、曜日・時間が変わる場合があります。ご了
＊ ママビクスは子連れ OK ですが、お子さんへの目配りをお

日　程	10:00～10:50	11:00～
4月　7日（金）	スマイルキッズ	スマイ
4月21日（金）	ママビクス	スマイ
5月12日（金）	スマイルキッズ	スマイ
5月19日（金）	ママビクス	スマイ
6月　2日（金）	スマイルキッズ	スマイ
6月16日（金）	ママビクス	スマイ
6月23日（金）	スマイルキッズ	スマイ
6月30日（金）	ママビクス	スマイ

問い合わせ・申し込み連絡先：

ママ・おじいちゃん・おばあちゃんも、みんな一緒に遊びに来てね。
プレママさんも大歓迎！いろんなお話、しませんか？

場　所：サンパル秋田・和室（大町・旧ダイエー５階）

ところで「Seed 通信」が創刊された当時、秋田市には子育てに的を絞った情報誌の類はなく、多くの人が子育てに関する情報を入手する術を探していたようである。というのは、「Seed 通信」（右図）は読者の対象が「育児サークルのスタッフ向け」と限られていたにもかかわらず、その通信を目にした人たちから、「もったいない」「対象を広げてはどうか」という声が多くあったからである。

そこで山崎さんは他のメンバーと相談し、次号からは親子で遊べる遊びや季節の遊び、絵本の紹介といった、育児中の親子に向けた情報の提供に方針を転換したのである。配布先も秋田市を中心に、秋田市子ども未来センターや秋田県児童会館など、県や行政の施設も含めた子どもが集う場所に広げた。さらには活動内容がサークル支援に限られなくなったことから、「サークル OB 隊 Seed」という名前を、「『支援』じゃおこがましいから、『応援』にしようか」と「子育て応援 Seed」に変更することとなった。現在活動中の「子育て応援 Seed」の誕生である。

２.「子育て応援 Seed」が手がけること

（１）「子育て応援 Seed」の活動内容

（訪問時配布資料より抜粋）

「子育て応援 Seed」が現在おこなっている活動は、多岐にわたっている。たとえば、「育児サークル スマイルキッズ」から名称および体制を変えた「子育てサロン スマイルキッズ」（月１～２回開催、右写真）や親子ビクス（月２～４回開催）などを開いて

親子の居場所づくりをしていることが挙げられる。また、「サークル OB 隊 Seed」時代から続くフリーペーパー「Seed 通信」や、「子育て応援 Seed」のホームページにて秋田市近辺の子育て情報を提供していることは、秋田で子育てをしている家庭にとっての「命綱」ともいえる活動である。さらに、ワークショップ形式で参加者自らが学んでいく「子育て学習会」の開催や、保育サポートの提供を行う託児グループ「ハローキッズ」の運営なども手がけている。

このように「子育て応援 Seed」は、幅広く子育てにかかわり、子育てを多方面から応援している団体として、秋田では欠かせない存在となっている。

（2）運営のスタンス

このように「子育て応援 Seed」はさまざまな事業を企画・実施しており、いまや秋田の子育てに関して「子育て応援 Seed」の存在を無視することはできないほどである。しかしながら山崎さんによれば、こういった幅広い活動も「後づけ後づけで、できることをやってきたら幅広いことになってきた」だけのことであって、最初から構想していたのでもなく、特別なことをしているわけでもないという。言い換えれば、親たちが我が子の成長と歩みを同じくして、その時々に必要とすることを可能な範囲でしているだけである、というスタンスをとっているのである。

こうしたスタンスは、「子育て応援 Seed」の運営体制の面にもあらわれる。「子育て応援 Seed」では 17 名のスタッフを擁し、月１回の定例会で運営方針を決めているほか、上記で挙げた活動ごとに担当者を配置している。年度の初めに「子育て応援 Seed」でやりたいことを集約し、スタッフそれぞれがどの活動に関わりたいかを自己申告してもらい、担当者を決めている。それは、スタッフの主体性を重視し、「お手伝い」としてではなく、自らが望むことを無理のないペースで楽しんでやっていくことを大切にしているからであり、またそのことが活動を長く続ける秘訣でもあると、山崎さんは語っていた。

（3）活動の広がりを支える理念

では、「必要なことや望むこと」を「可能な範囲で」取り組む活動が、なぜここまで広がったのであろうか。この疑問に対する答えを、「子育て応援 Seed」の活動のいくつかに見出すことができるだろう。

たとえば、子育て支援者の質の向上を目指して企画された「子育て応援スキルアップ講座」の開催である。「子育て支援者向け」とあるが、実際の対象は子育てサポーターをはじめとした子育て支援の活動にすでに携わっている人たちに限られない。そもそも山崎さんらが「私たちも含めて、よい支援者でありたい」と願い、子育てに対する問題提起の意味も込めて企画した講座なのである。

したがって、講座の対象は特に限定せず、子育て中のお母さんでも、現在子育てサポーターになっていない人でも受け入れることにしている。このような対象者の設定がなされるのは、「誰もが将来、子育てサポーターになるかもしれない」という期待を持っているからでもある。言い換えれば、子育てを「限られた人が行う、特別なもの」とせずに、誰もが携わるべき行為であることを念頭に置いているからであるといえる。

このように、「子育て応援 Seed」では、「子育て」とはある特定の人や時期に限られたものではなく、広がりを持つものであると捉えている。それは、子どもの年齢の異なるメンバーとの活動から学んだことでもあるが、何より、「子育て応援 Seed」の設立までのあゆみを見れば当然想定されることかもしれない。つまり、子育ては幼い子どもがいる時期に限られた特別な行

為ではなく、自らの子の手が離れた後に、他の子どもの育ちや親への支援を行うことも「子育て」であると実感した日々があったからである。

３． 秋田県の子育て事情と子育て支援の課題

いまひとつ、秋田県における子育て事情と、それに伴って「子育て応援 Seed」が考えている、さらなる「子育て支援」の課題を挙げておくこととしたい。

秋田県は概して給与水準が低い地域であり[1)]、子育て世帯に対する経済的な影響は非常に大きい。全体的に賃金が低いため父親の収入だけでは不充分であり、母親も働きに出ざるを得ない家庭も多い。その場合、子どもを保育所等に預けて就業することになる。しかし、母親の就労によって得られる収入が、子どもの保育料をまかないきれない場合も少なくない。そこで、近隣に農業を営む実家がある場合には、米や野菜をもらうなどして生活費を節約し、自宅で母親が子育てをすることを選択する家庭もあるという。秋田県で子育てをしている世帯にとっては、まずは経済的な支援が必要であると、山崎さんは言う。

しかし現在、この地域が子育てに関して抱えている根本的な問題は、幼い子どもを持つ親の世代だけではなく、より若い世代も含めた労働環境にあると、山崎さんは考えている。今回のインタビューの中で非常に印象深かったことは、「子育て応援 Seed」が今後行っていくべき課題として、「企業に対するアプローチ」が挙げられたことである。なぜ企業へアプローチをすることが重要なのだろうか。このことについて、筆者は当初、企業に勤める親たちの勤務時間を減らし、子どもと一緒に過ごす時間の確保を要望することであろうと予想していた。都市部ではそのような要望が多いと耳にすることもあるからである。しかしその予想はおよそ見当違いなものであった。山崎さんは企業に対し、「若者が地元（秋田）で働きたいと思える職場を増やすこと」を望んでいるのであった。若者たちは賃金が低い県内で就職するよりも、高い収入が見込まれ、かつ遊ぶ場所も多い他県の都市部へと流れていく傾向にある。それに加え、秋田には若者の流出を防ぐだけの魅力ある職場が少ないのだという。

秋田県の経済状況とそれに伴う若者の県外流出は、結果として少子化の問題にもつながっていると、山崎さんはみているようである。具体的には次のようなことである。県内に残った若い人が少なければ婚姻件数も少なくなり[2)]、連動して子どもの出生数も少なくなる[3)]。たとえ県内で就業して結婚し子どもを持ったとしても、２人目・３人目の子どもを産み育てることがためらわれるような家計の状態であるため少子化がさらに進行する、という一連の流れである。さらに言えば山崎さんは、少子化は子どもの健康的な育ちにも悪影響を及ぼすと考えており、その点でも「子育て支援」の課題として少子化をとらえているのである。それは、秋田県には豊かな自然があるにもかかわらず、子どもの数が少なくなったためにその自然を活かした集団遊びと、それによって見込まれる子どもの健やかな成長が望めないからである。

このような、子育てに関して経済的な停滞状況が引き起こす悪循環に対しては、子育て家庭の各自の努力や、市民団体である「子育て応援 Seed」の毎日の諸活動で対処できる範囲を超えている。企業にもその一翼を担う責任があり、その意味で山崎さんは企業に働きかける必要を感じているのである。

おわりに

「子育て応援 Seed」のホームページを開くと、冒頭に「秋田の子育てを、もっと元気に！」

とある。経済面での停滞と少子化に悩む秋田での子育てを、楽しく元気にしていきたい、という思いが伝わってくる。山崎さん自身も、「楽しんで、笑いながら活動をすすめていけば、自分もみんなも自然と元気になる。子育て支援者にはその“元気”が何より大切なのだ」と語っていた。こういったことからも、「子育て応援 Seed」は「子育て」を直接手助けするというよりも、「子育て」を通じて「元気」という「種（seed）」をこの地域に蒔いているように感じた。実際、こうした活動のあり方は、参加者である若い母親たちにも伝わっているようであり、「Seed さんに助けてもらったり、楽しませてもらったりしたから」と自主的に手伝いに来てくれる人もいるという。「子育て応援 Seed」の蒔いた「種」は、少しずつではあるが、確実にこの地域で元気な芽を吹いているようである。

写真：「子育て応援 Seed」のホームページ（トップページ画面）

最後に、「子育て応援 Seed」の取材を通じて筆者が感じた「子育て支援」のあり方について、簡単に述べておきたい。秋田県における経済状況が少子化を招き、それが子育て・子育ちにも連鎖しているとみられることからもわかるように、子育ての現場からは遠く離れているように見えることがらも、巡り巡って子育てに影響を及ぼしていることが少なくない。そのような意味で、子育てとは、直接・間接を問わず社会全体として誰もがどこかで関わりを持つものであり、それゆえ、誰が子育ての当事者であるか否かを明確に線引きすることは難しいのではないかと考える。したがって、子育て支援をおこなう側でもそのことを意識し、幅広い視野を持って子育て支援にあたらなければならないのではないだろうか。とはいうものの、子育て支援に携わる側が、特に個人や市民団体が実際にできることは限られている。「子育て応援 Seed」も然りであり、県の経済状況や企業経営に子育て支援の課題があると考え、なんとかしたいと思っていても、直接それらには手が及ばない。だからこそ、「自分たちができることは何か」「できないことは何か」を適切に把握したうえで、他の支援者に「できないこと」を依頼して、社会全体として子育て支援に取り組むような、そういった関係づくりが期待されるのである。

（遠藤宏美）

＜注＞

1) 秋田県の最低賃金は、青森県や岩手県、沖縄県と並び、610 円である（平成 18 年度、厚生労働省）。この額は全国で最も低い。
2) 平成 17 年の人口動態統計によれば、秋田県の婚姻率は全国で最も低く、人口千人に対する婚姻率は 4.3 である（全国平均は 5.7）。
3) 秋田県における人口千人あたりの出生数（出生率）は 6.7 人と、全国で最も低い（全国平均は 8.4 人）。なお、２番目に低い徳島県でも 7.3 人であり、秋田県の出生率は全国的にみても極端に低いことがわかる。さらに秋田県は 1995（平成７）年に出生率が全国最下位に転落した後は一度も最下位から抜け出せておらず、一貫して減少を続けている（秋田県子育て支援課）。

＜引用・参考資料＞

・子育て応援 Seed　ホームページ（アクセス日：2007 年１月８日）

http://www.akita-kenmin.jp/kosodate-seed/philosophy.html
・厚生労働省『地域別最低賃金の全国一覧』（アクセス日：2007 年２月 22 日）
http://www2.mhlw.go.jp/topics/seido/kijunkyoku/minimum/minimum-02.htm
・厚生労働省『平成 17 年　人口動態統計（確定数）の概況』（アクセス日：2007 年３月１日）
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei05/hyo3-2.html
・秋田県子育て支援課『データで見る少子・子育て』（アクセス日：2007 年３月１日）
http://www2.pref.akita.jp/kosodate/syousika/data.htm